

## 葛飾北斎《神奈川沖浪裏》と曾我蕭白の描く波についての一考察

印刷教材第2章では《神奈川沖浪裏》(図1)が透視図法の換骨奪胎を通して西欧世界と日本の交わりの中で誕生した経緯が述べられた。しかし日本国内に目を転じると《神奈川沖浪裏》の奇抜で大胆な構図は曾我蕭白の描く波の影響も無視できないのではないかと思う。本稿は北斎の3万点以上の作品の中から《神奈川沖浪裏》について蕭白の描く波との共通性に目を向けるとともに、現代日本の漫画やアニメにもその影響が及んでいることを考察しようとするものである。

第1は、《神奈川沖浪裏》の奇抜で大胆な構図の発想の淵源である。大胆な構図は北斎に限ることではなく、江戸期の絵画に見られる特徴でもある。『淇園文集』によると寛政年間(1789年~1801年)に京都において公募展のはしりというべきものがあり、画家は競って新奇を出すことによって人目を引こうと努めたという<sup>1</sup>。また京都の民衆の中には社会の沈滞に反発し、伝統主義のアカを落とそうとする鋭敏な美意識があった<sup>2</sup>。この頃になって大胆な構図を許容する自由な雰囲気世間にでてきたのである。

第2は、蕭白《群仙図屏風》(図2)に描かれた波である。蕭白(1730年~1800年)は北斎(1760年~1849年)よりも30年早く生まれている。この画が描かれたのは1764年である。蕭白は伊勢、播州、京都で活躍し、北斎は江戸の人なので、二人の間に直接の交流はなかった。しかし北斎が蕭白の画をまったく知らなかったということも考えにくい。意識の片隅にはあったと考えてもおかしくない。辻惟雄は蕭白と北斎の「鬼面人を驚かす見世物精神、怪奇な表現への偏執」などの共通性を語っている<sup>3</sup>。その影響が全くなかったとはいえないのである。

第3には、蕭白の《波濤鷹鶴図屏風》(図3)である。むしろこちらの波の描きの方が《神奈川沖浪裏》との類似性が近い。大胆な波の描き方は北斎が創始者であるとはいえない。けれども北斎は西洋からもたらされたベロ藍を使用して砕け落ちる波となだれ落ちる波を描き分けた<sup>4</sup>。江戸期の美術は多彩で豊かであり、互いに相手の画を意識し、影響を与え合った。

以上を受けていえることは、世界的に最も知られている《神奈川沖浪裏》であるが、その誕生には西欧世界の絵画技術の習得があり、その影響を受けつつ、日本国内においては、江戸期の民衆の自由な意識に支えられた大胆な構図の豊かな蓄積の恩恵を受けている。その蓄積の集大成として北斎の《神奈川沖浪裏》が日の目を見たといえる。現在のように情報の交流がない時代であったので、北斎が蕭白の画を直接に見ていたと考えることは難しいが、周囲の状況を総合的に勘案すると北斎の画の中には蕭白の構成が流れている。それは大胆な構図のもとで自然を活写する日本美術史が世界に誇る特質である。日本の漫画やアニメも突如として現れたのではなく、鳥獣戯画を初めとするこうした土壌の中で育まれてきたといえる。現代の日本発のアニメの盛況を見ると、西欧世界から学んだ美術や文化を今は日本から世界に発信し続けている。

1 辻惟雄『奇想の系譜』ペリカン社、1988年、110頁

2 同上118頁

3 同上101頁

4 永田生慈監修『葛飾北斎』東京美術、2019年、56-57頁



图 1 葛飾北齋《富嶽三十六景・神奈川沖浪裏》1831 年頃，大判錦絵，島根県立美術館



图 2 曾我蕭白《群仙図屏風》六曲一双 1764 年，紙本著色，172.0×378.0cm，文化庁蔵



图 3 曾我蕭白《波濤鷹鶴図屏風》六曲一隻 紙本墨画，154.1×359.2cm，個人蔵